2023 年度　帰国隊員支援プロジェクト　実施完了報告書
（協力活動 / 調査・研究）

提出日:2024 年 4 月 20 日

氏名:平尾莉夏

プロジェクト名称:　ベナン共和国ジュグー市におけるセルフヘルプによる
プラスチック資源循環の実践に関する現地調査

実施国:ベナン

実施期間:2023 年 9 月 2 日～2024 年 2 月 25 日

1　活動実施内容概要

アフリカ社会の特徴の一つは脆弱な行政サービスであり、日々発生するごみの収集サービスの普及率も 50%以下である。その結果、世帯はセルフヘルプ（自助）によってごみの管理をしており、野積みや野焼き等による公衆衛生の悪化が問題である。

このように世帯自らによるごみの管理が広がるベナン国ジュグー市において、プラスチックごみの削減に向け、どれくらいのポテンシャルとどのような課題があるのかを明らかにし、アフリカ社会に適したプラスチック資源循環政策のデザインへ寄与することを目指す。具体的には、以下の 2 点に主眼を置いた。

1.1 家庭由来のプラスチックごみ（家庭で使用終了したプラスチック）の量と種類ごとの管理方法を明らかにし、家庭由来プラスチックのさらなる資源利用のポテンシャルを評価した。

1.2 市内の経済活動において、中身を変え繰り返しリユースされるプラスチック容器包装について、リユース品を選択する要因を明らかにし、代替素材との比較を通して脱プラスチックへの課題を検討した。

2　活動の結果・成果（具体的に何がどう変わったか、何がどういった状態に変化したかを記述）

2.1 家庭でのプラスチックの発生原単位と組成（種類）

家庭由来のプラスチックごみの発生量と組成について詳細にわかった。特に、付着物を落とした重量が明らかになった。これらはジュグー市において、これまで明らかにされていなかったことであり、プラスチック包装の中でのごみ発生量の比較が可能となったことで、どの種類のプラスチックごみが取り組む緊急度が高いのか検討できるようになった。

2.2 家庭でのプラスチックの管理方法

ものを長く使うために行うリユースの実践について、それらがごみ量の削減にどれくらい貢献しているのかが推算できた。報告者自身の前回調査時（2022 年）には、ごみや資源としての排出に理解がとどまっていたが、家庭内の実践について明らかにすることができた。

2.3 容器包装のリユースの実態の把握とリユース品の選択要因

地域特有の包装のリユースについて、なぜそれが行われているかを明らかにし、さらなる促進には何が課題なのかを検討することができた。ジュグー市のステークホルダー（市

役所、ごみ収集団体および住民）との議論の中ではリサイクルまたは廃棄が主な管理手段として認識されてきた中で、リユースの可能性と限界について明らかにすることができた。

3 （応募様式に記載した）期待された成果・効果と実際の相違点。異なる場合はその原因と対処内容、及びその対応による結果

3.1 資源循環分野でインフォーマルセクターの射程を広げた独創的な査読論文 2 報および博士論文

調査結果を査読論文として投稿し、その内容も含めて博士論文としてまとめる予定であり、変更はない。

3.2 申請時の「期待された成果・効果」2：成果のアウトリーチによるジュグー市の現実の正しい理解の促進

本調査の結果およびそれらをまとめた査読論文をフランス語に訳した上でジュグー市役所に共有する予定であり、変更はない。

4 活動成果の持続発展性

本調査の結果と 2024 年度の現地調査（2024 年 9 月～12 月頃を予定）をふまえてまとめる博士論文の内容を、2024 年度の現地調査および学位取得後の 2026 年度以降に市役所担当部署へ共有する。

今回の現地調査渡航時から、ジュグー市において持続可能な廃棄物管理・資源循環モデルを構築するための国際協力プロジェクト（技術協力プロジェクトを予定）の立案についての話し合いを市役所担当部署と進めている。本調査の結果を、その内容の決定に活用する予定であると同時に、住民を市役所での議論に招待したり、市役所担当部署とともにごみ収集利用者・非利用者宅の訪問に招待したりすることで、市役所担当部署の当事者性の向上と住民−行政間のコミュニケーションの深化に貢献したい。

なお、これらの協力プロジェクトを通して、将来的にジュグー市が主体となり廃棄物管理・資源循環を推進していくことを期待している旨を、市役所担当部署へ意識的に伝えていく。

5 苦労した点、反省点、本活動を通じて得られたこと、学んだこと、それらを今後どのように活かしたいか、教訓等

本活動は、大学院入学以降初めての長期的な調査であった。質の高い調査にするために、実施に関する一連の業務（計画策定、調査員とのコミュニケーション、日本にいる指導教員への進捗報告等）のいずれにおいても主体的に作り上げていくことが必要であり、研究者としてのキャリアを選んだ場合のライフスタイルをより具体的にイメージできるようになった。

反省点として、願書提出時から 6 か所の変更が生じた。想定内であった物価上昇を考慮していなかったことを含め、概算の積算が甘かった。単価設定の際、今後は良く確認することを教訓として肝に銘じる。

同様に反省点として、併給した助成金との兼ね合いで、各助成金の使途についての事務連絡が大学側とうまくいかなかった。メールによる意思疎通のすれ違いが起こらないよう、渡航前に対面ですべての疑問点を解消しておくことを教訓とする。

6 ご自身の今後のプラン、及び本活動の活用予定・計画

本活動を通して得た知見に基づき、2024 年度はプラスチック包装の削減に関する調査研究をジュグー市で引き続き行う予定である。

また、本活動を通して収集したデータは、博士論文の一部とする予定である。学位取得後は、日本の開発コンサルティング企業で勤務するか、海外の研究機関でポスドクとして研究を発展的に継続したいと考えている。

以上